野間宏全集

第二巻

野間宏全集

第二巻

筑摩書房

野間宏全集　第二巻

一九七〇年二月十日第一刷発行

著　者　野間宏

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
郵便番号一〇一―九一
振替東京四一二三

本文印刷　暁印刷株式会社
製本　山晃製本株式会社

目次

バターン白昼の戦　3
南十字星下の戦　22
砲車追撃　88
コレヒドールへ　104
わが無花果の実　127
悲しい錘　132
小さい空の下　163
硝子　188
風と炎　214

奪い取られて　233
夜　学　252
雪の下の声が…　271
志津子の行方　300
一　夜　318
別　れ　330
急　流　337
逃　走　356
昭子とたき子　374
一　日　384
立つ男たち　397

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

二つの花　404
胎児　407
車の夜　421
軍隊教育について　435
戦場でのノートを開いて　442
長い間喘ぎながらようやく　445
〝人民闘争〟と〝回心〟　本多秋五　453
野間宏　日沼倫太郎　457
解説　中薗英助　475

小説集 II

パターン白昼の戦

一

戦闘中水沢たち初年兵のする仕事は弾薬と水とをはこぶことだった。四年兵と三年兵は砲手として砲の側にいたが、水沢たち弾薬手兼雑役の初年兵は砲手達の使う弾薬と水とを後方から運び再び後方の退避陣地のなかへかえってくるのである。水沢二等兵達は、はらばいながらその弾薬と水とをはこぶので、ずい分時間をとった。彼等は雑草や灌木のなかを身体の重みで道をつけながらはこぶのである。しかし砲手たちは弾丸よりもむしろ水の方をよく使った。敵の攻撃をふせぐことは退避すれば可能だが、熱帯のはげしい暑さはいかにしてもふせぎようがなかったからである。

すでに戦闘は追撃戦にはいっていた。それ故両軍が真正面から対陣し、小銃よりも砲の方が戦力の中心になるなどということは余りなかったので、砲を用いる回数はかなり減っていた。もちろんときに松林や竹藪のかげに集結した敵の部隊を見出して砲が要求されることはあった。しかし砲が射撃準備をしているうちに、目標の敵部隊はさらに敏速に後方に移動していて、砲は射撃開始の命令に達しないうちに移動を開始しなければならなかった。そして水沢二等兵達は主として水をはこぶ役目を引き受け、それをはたしたのである。しかし水を運ぶということは弾薬をはこぶよりもむしろ困難な仕事だった。もちろん弾薬は重かった。それは一発で一貫目を越えていた。一発ずつを別々にはこぶのではなかった。三発入りの鋼製の弾薬箱に弾丸を三発あるいは二発入れたものを引きずるようにしてはこぶのだ。しかもその重さは主として弾薬箱の方にあるといえた。しかしそれにしても弾薬箱の位置ははっきりときまっていた。支那馬の背にのせた駄載具の両側につけられていた。それを馬の背から二人がかりで引きおろす。しかし水の出る場所はそのようにはっきり一定しているとはいえなかった。それは山と山との間の谷底の小さな流からくむほかはない。

ところが部隊の進む場所はむしろ山の高みであり、あるいはまた頂きの背に通じる高い道路だった。すると水沢たちはその谷底からその頂きのところまで水を運んで行かなければならないのだ。しかし一体どこにその谷があるのか、それをみつけるのは困難だった。なぜといって敵の部隊を発見するか、あるいはまた前方の部隊から連絡があるかして、ただちに砲の位置を決定して砲を据えたとき、あたりの地形がほとんど頭にはいっていないうちに、谷底の在り処をさがし出さなければならなかったから。少しでもぐずぐずしていようものなら、たちまち三年兵たちは砲の傍からとんで来てなぐり据えたろう。四年兵たちは砲側をはなれるということはなかった。しかしじっと三年兵の気合いの入れ方を監視した。するとすでに弾薬箱をはこびにかけだしていた二年兵が、後へひきかえしてくる。そして初年兵達にはげしい言葉をあびせかけながら、手をかける。すると水沢二等兵たちは「はいっ、二年兵殿」といって、ただうろうろと体を動かした。やがて彼等は辺りの竹藪のなかへはいって行くのだが、谷底の方向をかんだけでさがしあてるなどということは、よほど戦闘に熟練した古い兵隊でもすぐにはできるものではない。ただ後を追われるようにしてさがしながら、すすんで行くが、谷底への下り道はみつかりはしない。すると、もうすぐにせきこんでくる水沢達の頭のなかにうかんでくるのは、「なんだ、こんどの初年兵のにぶいこと、まだかえってきやがらん……何という役にたたんやつらぞ」などといいながら、かわいた口からねばねばしたつばきを地面にはきだしている陰気な四年兵たちの姿である。(四年兵たちは満洲から北支、中支にわたる三年間の戦闘にたえてきたのだが、このフィリッピンに渡ってくるときに、こんどこそは死ぬ時期がきたのではないかという予感をもっていたので、ときどきひどく陰鬱な沈黙におちいって下の兵隊たちを恐怖させた。)

水沢二等兵たちは駈けて行った。水沢二等兵たちはもう連日のはげしい行軍で体力を失い、歩くだけの力もないといってよかった。しかし彼等は駈けた。少なくとも四年兵の眼のとどく間はかけださなければならなかった。彼等はやせ細り、埃だらけだった。ここへ来る少し前、(それだから二カ月程前)冬のさむい風の吹く日に、上海で支給されて、しばらくそれをつけてふるえ上っていた新しい夏服もいまは汗と埃で幾つも汗の縞ができていたが、その上へまた埃をかぶって真白だった。しかもその服は肉の少なくなった体の上におおいかぶさって彼等の行動を重々しくした。彼等は三年兵や四年兵や二年兵のように現役兵ではなかった。年齢のいった補充兵だった。大方は兵隊になる前に勤務をもっていたので体力は弱くその行動は敏速を欠き

がちだった。しかしそれはもはや単に動作が鈍くなったなどというのではなかった。彼等はもうすでに百キロ以上の道をあるいていた。しかしいまや歩行も困難で、四年兵の前では一応駈けてみせることはみせたが、やがてみながら茂みのなかへ体をひそませて監視の眼もとどかなくなると、そこにしゃがみこんでしばらく呼吸をし、ようやく甦いだすのだ。……すでに多くの兵隊はマラリヤのために一線から後送されていた。幹部候補生出身の二人の小隊長はいずれも熱病のために倒れて、マニラに急送され、准尉と曹長とが小隊長の位置についていた。当番兵を二人も手元におき、兵隊たちが食糧がとだえて、一日中乾パン十個ですごしたときでさえ、観測指揮班の傍にいてコーヒーをわかさせ、十分飲み食いしてきた隊長さえ、てりつける太陽の下で酔ったように顔を真赤にしてぐらぐらする首をふっていた。もちろん中隊長には乗馬があったので、落伍するなどということはなかったが、……すでに砲をひく日本馬はみな、鞍傷が化膿し背中の両側に大きな穴があいて使いものにならず、第二線陣地の留守隊に引き渡した。そして残っている馬といっては、ただ暑さにつよい小さな支那馬だけだった。すると部隊のなかで照りつける熱の下で、まるでその熱を受取ることがないかのような無表情な硬い顔をして、硬い蹄でつながれた柵のあたりを平気でけりつづけているなどというのは、この馬くらいのものだった。

砲はM……山の中腹のごつごつした岩の間から砲身をのぞかせて据わっていた。太陽はまだ真上の空にはなかったが、烈しい暑さをまして、カムフラージをほどこした太い砲身と四角い防楯をやき、砲手たちのシャツの外に出た首筋や顔をやきつけ、さらにシャツのなかの身体をむしやきにした。

ようやく山ぎわの茂みのところまできて、水沢二等兵は後をふりかえってみたが、向うの砲手たちは焼けつく砲の側から少しく身をはなして前方の崖の左の方にひらけている遠景のなかの小さな山の突角の辺りをじっとみつめていた。そこに先程敵の姿がみえ、その砲身の先らしいものがその茂みの間からみえたのである。分隊長の梶本軍曹がバナナの葉っぱをくっつけた戦闘帽を防楯の横からつきだして、双眼鏡で偵察をつづけていた。四番砲手の背の高い西田上等兵が背をかがめて砲眼鏡をのぞきこんでいた。体のごつい木寺上等兵は土の上に足を折ったまま、背をのばして向うをむいてじっと二人の観測を待っていた。しかし先程のアメリカ軍の大きな砲身らしいものはもはや姿を消してとらえることができないのだろう……分隊長の梶本からは、射法と標準点を示すための号令がかかりはしなかった。それ故に砲から少し後にさがったところに、「伏せ」の姿

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

勢をとってじっと待機している二年兵たちもいつまでも立上らなかった。

二

水沢たちは茂みのなかをわけて谷をめざしてくぐって行った。するとすぐに傾斜がはじまり、谷間の在り処はいつもとはちがってそれほどの努力をすることもなくみつけることができるように思われた。その上一たび四年兵三年兵たちの眼からとおざかったことがはっきりすると、いかに敵の前であろうと、初年兵たちの足はもはや動かなくなってくる。彼等はいつも強気の水沢の言葉で斜面にどたりと身をころがした。

「おい、もうちっと、向うへ行ってから、休もうや……」

という洗濯屋の江本の言葉は空しく茂みのなかに消えて行った。

水沢たちを谷底の方へみちびき引いて行くものがないのではない。谷底は彼等を強い力でひっぱっていた。そこには水があったからである。すでに水はみなの水筒のなかには一滴もなかった。彼等が身体につってきた大きな竹筒のなかにも一滴もなかった。そしてあの砲側の人たちもまた、彼等が谷底からくんでくるその水をまっているのである。……しかし彼等はみなしばらくまるでぼろくずのように動かなくなった。ときどき薄い埃をかぶった黒い唇が、もじゃもじゃした鬚だらけの口のところで、はーはーと動くだけだ。……水沢もしばらく何をすることもなく、身体を投げて眼をとじていた。彼の頑丈な身体ももうその体力の限界にきていることが、自分でもはっきりしていたが、いまはそのことを思うことも彼にはできなかった。斜面のあらい砂が下から身体にふきかけてくるあつい熱につつまれて、見えてくるのは母親らしいものの姿。小さな体、小さな顔。いつもさむさにいたむ若いときから曲った腰。母親は父親とは全く反対にじつに小さかった。しかし体の大きな父親よりはずっと丈夫だった。そのはやく夫を失って、ひとに雇われ、いろいろの家庭にはいって働いてきた母の姿——決して楽ではない生活のなかから、学費だけは欠かすことなく送ってきたなかの姿も、いまはそれほどはっきり感じとることが出来なかった。過去はすべてどこかへ消えたのだろうか……。すると次にようやく母親の姿よりもよりたしかな姿をとって浮んでくるのは、自分自身の姿である。少し骨ばった頬をした、眼玉の大きい顔、十分体重のある、わざとのそのそと歩く身体……二度ばかり学生運動を通じて留置場にほうりこまれ、倒れることのなかった自信のあった身体。……自分は一体どこにいるというのだろうか……。このあつい砂の斜面の上にごろんとしていてどこへ行

こうも行きようがないではないか。どこへも行こうとて行けはしない、軍隊のなかへしっかと囚えられて、その外のどこへも行けはしないのだ。かつて内地にいて戦争について論じていたとき、学生時代戦争反対の決意をかためるために、警察の眼をのがれて郊外の友人の家に集ったときには戦争について互いに論じながら、誰一人少しも戦争を知りはしなかった。水沢はようやく眼をあけて真上をみた。その濃青の空はまさに青い、フィリッピンの空である。そしてその空に向う彼の眼のはしにごじゃごじゃうつっている、太い大木のしげみのようなものは、鼻の下からつきでた鬚の一本一本である。彼のその顔は全くやせはてて骨がつきでていた。顔色は黄色く、また青かった。そして長い細い身体がその下にだらりとのびている。そこには全く過去の彼の姿はなかった。

傍では身を起した八木が巻脚絆を解いて袴下を用心しながらめくりあげていた。するとたちまちくさった肉の匂いがあたりにちり鼻をついた。八木の右脚はすでに腐っていた。それは次第にはれ上りがりがりにやせた足の他の部分とはっきり対照をつくっていた。彼の股のつけ根にもまた大きなかたまりができていた。彼は菓子屋の息子で高商出だったが、この戦地に出発するために内地の兵営を出発し、広島の近くの小学校に船をまってとめられていたときにも、面会にきた父親からすでにほかでは手に入ることのなかったチョコレートや色々の西洋菓子を手に入れて、ひとにかくれてこっそり食いつづけてみなに憎まれていた。彼はまた英語がよくしゃべれたので、ときどきこの山岳戦になるまでには、小隊長につかわれて原地人との間に交渉をすすめる役目もした。しかしいま彼は部隊のあとについて歩いて行くというだけがせい一杯だった。彼はただ一日もはやく戦闘が終って入院し、大きくはれ上った身体を切りとってもらうことを考えていたが、敵をおいつめる速力と腫物が身体をくさらせて行く速力のいずれがはやいかは、予測することができなかった。八木は腫れ上った足をぼんやりした小さい眼でただじっとみつめるだけだった。以前は彼がこうして自分の足をいたましそうに出してみるとき、だれもかれもがよく横からのぞきこんだものだが、いまは、誰一人、見向こうとしなかった。先程から四年兵たちのことを気にして長い首を動かしていた江本も、もう動かなかったし、斜面の一番下にころがって、無表情な顔で空に見入っていた一番年の若い原口も、眼をとざしていた。彼は昨日は谷底へ水を取りにおりながら、「つらいわなあ、つらいわなあ——、俺あ、もう、すすめんよう」といいながらかがみこんで、泣きだした。そしてその子供のような恐怖と苦しみをもうかくすことのできない泣声は、みなの身

体をつらぬいた。それはみながいつしか一様にあげたいと思っていた泣声であり、またいつかあげさされるにちがいない泣声であった。「つらいわなあ——俺はもう、あかんよう」原口は今日はまた力をたくわえることができたのだろうか……。そのようなことはある筈もなかった。彼はときどきつぶった眼をひらいた。しかし眼をひらいても閉じても、その顔中砂埃で、塩のふいたようなむくれた顔は表情がかわらなかった。トッケーが左の大きな竹藪のなかでないていた。その肉をふるわせてでてくるような陰鬱な声はそこにころがっている兵隊たちの魂をとおってどこかへきえて行く。兵隊たちはこうしてこんなところで身体をごろごろさせて時間をついやしていれば、やがてひどいめに合わなければならないということをはっきりしっていたが、いたいめに合うのはいまではなく、それは一時間のちか、あるいは今夜、全員が戦闘をおえてねる前かだ。それまで生きていられるかどうかはわかりはしない。腹わたのゆれ動くような苦しみはころがっている兵隊たちのなかで、ばくはつするだろうか。兵隊たちはすでに自分の苦しみをはぜあがらせる力さえ失って、よろよろした生命で自分を保っている。

水沢たちの水汲み作業は長い時間かかってしまった。それほど遠くはなかった谷間に行きついて分隊全員の水筒に水をつめ、さらに持ってきた四本の竹筒をみたしてはこんでかえるのに一時間以上の時間を費したのである。もちろん水を一ぱいつめた水筒を何本も肩にかけ、その上竹筒をかかえて傾斜を上ってくるということは、体力のいる困難なことだった。水沢たちは行く途中、身体をごろごろころばせてようやく保つことができた体力をまたこれでつかいはたさなければならなかった。彼等が谷底の細い水流にそれぞれ顔をつっこんでのみあかした水は、たちまち汗となって流れでて、埃まみれの上衣を黒く濡した。すると首筋や手首や額などが照りつける日にやかれて肌がいたみだした。すでにその辺りもまた着ているものにすれて赤くはれあがろうとしていたのである。……汗をふきだした彼等の体は急に体重をましたように重くなった。彼等の足は一歩ふみだす毎に次第に上らなくなって行った。……そして彼等が砲のところまでかえりついたときにはすでにそこにはけわしい空気が流れていた。それは近よらなくとも、遠くからちょっとみただけで明らかなことだった。そして彼等はすでにそこに行きつくまでになぐり倒されることを覚悟した。(彼等は内地で三カ月間教育をうけて、外地に出発したのだが、もし外地にでたならば、毎日班内で受けてきた私的制裁も少しはゆるむのではないだろうかと思っていたがそ

のようなことは少しもなかった。外地には、内地ではみることもできなかった四年兵が三年兵のまだ上にいて、初年兵たちをしめ上げていた。そこで彼等はこんどは戦闘がはじまったならば、まさか戦闘中に、敵とたたかっているときに、味方の兵隊をなぐり倒すなどということはないだろうと期待したが、戦闘になって敵を眼の前にするような状態になったときも、決して私的制裁はやまなかった。四年兵たちは砲側に弾薬をはこんで行く初年兵の弾丸のはこび方が少しでもゆるむと、敵を前にしていつ一弾でやられるかもしれないいらいらした気持を初年兵の身体のなかへ拳骨にしてぶちこんだ。)

水沢たちはまず後方の二年兵たちに水筒を渡すと砲のところまで竹筒をかかえてよろよろしながら進んで行ったが、双眼鏡をすでにケースにおさめた梶本軍曹は、まがったような頬を一層深くまげて、彼等をじろりとみた。西田上等兵はその大きな手をぐっとみなにつきつけるようにして、水筒の紐をひったくった。竹本兵長の厚い大きな唇はぐっとつぐまれたまま開かなかった。木寺上等兵も何もいわなかった。三年兵の上等兵たちもみなこれにならって黙ったままだった。それは気味の悪い時間だった。水沢たちはすでにいまに怒声と拳がとんでくると思っていた。

「水のあるところが、いくらさがしても解らないので、みつけるのに手間取り、おそくなりましたです。」八木は小さい低い肩に引きずるようにしてかけて運んで来た水筒を一本一本肩からはずして上等兵達に渡しながらいつものよだれのたれるような調子で言訳をしつづけた。彼は哀れそうに眼をしょぼしょぼさせて、相手の顔をうかがっていた。しかし八木のやせた手から水筒をうけ取る方は、一言も言葉をもらさなかった。水沢は砲の後尾に腰をおろしている三年兵たちのところに水筒をもって行ったが、「おい、やろう……息をいれてきやがったな……今晩、その眼玉をもっと外へつきだしてやるぜ……」とうなるようにいうのを聞いた。彼はたち上ってのそのそとちかづいてくると、水沢の水筒をいくつもつるした自由のきかない体に足をあげた。そして水沢がどうと倒れた上にのしかかって水筒を一つ一つ取った。彼等は初年兵の水沢たちよりもはるかにまだ体力を保っていたが、それは初年兵たちが小休止がかかったときでも、馬の水をさがすために駈け廻っているにもかかわらず、休息をとることができるからであり、初年兵が全員の飯盒(はんごう)をたいているとき、天幕をはっているとき、夕食の後始末をして、馬に水をやり、翌日の朝食の米を洗っているとき、すでに寝入ることができるからなのである。

上の兵隊たちはものを言わなかった。そして無言の威圧が初年兵の上にかけられていた。しかしそれは初年兵たち

にとってはむしろ好都合なことだった。一言もものを言われないということは、薄気味のわるいことであり、恐ろしいことだが、手をつかって限りなくなぐり倒されるよりは、はるかにしのぎよいことだった。すでに神経などというものは消耗しつくした体力とともに、身体のどこにもないかのようだった。

梶本軍曹は水筒の水を一気にのみおわった。そしてこんどは竹筒の栓をぬいて口をあてたが、たちまち口にふくんだ水をはきだした。

「ちぇっ、なんちう水をくんできやがったんや……一時間も二時間もかかって、一体どこのどぶの水をくんできやがったんや。おい、西田、お前、こんな水を、この俺にのませる気か。」

「はいっ……班長殿」分隊長のところにかけつけた西田上等兵の顔はかわっていた。「初年兵の野郎、班長殿に、なんちうことしやがるか……。」

「おいっ、西田、えらい水飲ませてくれるな……え、戦闘になったら、お前ら班長の世話がやけんとでもいうのか……え、それならそれでよい！　俺は明日から、なんでも自分でやるぞ……おい、西田、こんな兵隊つくりゃがって、これで敵にかてるおもてやがったら、あてがちがうぞ……。」

そして梶本班長のこの声で、すべてが爆発し一変したのだ。古い兵隊たちはたちまち、猛り狂う犬のように初年兵の上にとびかかって行った。そして自分の貴重な体力を費すのもかまわず、うちたおした。「おい、初年兵、お前ら、班長殿に、あんなことをいわして、どういう気持か、いうてみい。え、恥しいおもわんのか。え、一体、何時間あったら、水がくめるいうのか。水をさがすのに手間どった？　うそつけ、水がどこにあるかくらい、ちょっと、辺りをみまわしたらわかる。この俺の眼をごまかすことはできんぞ……」西田上等兵は、うつぶせになっている初年兵の頭を、編上靴（へんじょうか）で一つ一つけって行きながら言った。それから倒れてじっとしているものの上に冷酷な命令をだした。

「おい、初年兵、もう一度水を汲み直してこい。行って班長殿にのみ直してもらえる、きれいな水を汲んでこい。野戦やおもてちょっと、ゆるめておいてやると、手をぬきやがるけど、こんどこんなことをしやがったら、承知せんぞ。」

三

初年兵たちは再び全員の水筒を集めて肩にし、流れのあるところまで、水を汲みに行ったが、こんどは彼等のうしろには、二年兵の石山一等兵が監視のためについてきた。

彼等は石山一等兵に後を追われるようにして、水を汲んでかえった。しかしながら水筒は空にされた。そして彼等はまた水汲みにやらされた。

石山一等兵は後から初年兵たちを追いながら、ときどき水沢のところにきては、お前は生意気だといって、背中をつついては、またやってきた。するとこんどは二本の指で頭の後をきつくつついた。「おい、返事せんか、返事。」

「何の返事するんですか?」水沢はゆっくりと首をまわして、相手の顔をみた。水沢は相手の低いつぶされたような鼻の頭をじっとみた。この農村出身の石山はむら気な人間で、以前の駐屯地ではよく水沢にパンなどを酒保で買ってきてくれたが、野戦にでてからは、まるで初年兵いじめを固く決意でもしたかのように、初年兵につきまとい、それによって古い兵隊に認められようとした。古い兵隊にみとめられれば、野戦では楽にすごせたし、たとえ体力がないとしても、一人前の顔ができるのだ。石山はしばらく水沢をじっとにらみつけてとびかかってくる気配を示していたがようやく茂みのなかで、自分は初年兵に取りまかれているということに気づくと、薄笑いをうかべてだまってしまった。水沢はわざと両肩をゆすって歩きだしたが、彼のつかれ切った体のうちにもえ上った怒りはやがてすぐぐったりと消えて行くようだった。いかにばく発させようにも、初年兵である限り、どこに向ってもばく発させることのできない怒りは、水沢のうちにつみかさなって、幾度か体をこまかくふるわせたが、やがてまた小さくしぼんで体のどこかに消えて行くのだ。

初年兵たちがようやく二度目の水を汲んでかえってきたとき、すでに班には出発準備がかかっていた。二年兵たちは、ずっと後の茂みのなかにつないであった馬をひきだして、弾薬箱に弾薬をおさめていた。水沢たちは水筒を渡しておいて砲のところにかけつけなければならなかった。彼等は左側の切りたった崖のところにかためておいてある照準具箱と轅桿と砲尾被、表尺被などを持ってかけて行くのだ。

「出発準備」梶本軍曹は繰返していた。水沢は轅桿と担綱を取りに行って、かけつけようとしたが、しばらくかけるうちに肩の水筒の一つがずりおりて腰から足にまといついて、ぶっ倒れた。「おーい担綱はやくもってこんか……」西田上等兵が向うでどなっていた。水沢が顔中真白にしたまま、起上ってはしって行くと、「こいつ、おそいわ」西田上等兵は担綱を取って、そこについている金具で彼の顔をはたいた。「おい、背負袋をどこいやりゃがった……背負袋を忘れやがって、出発する気か。」

水沢はようやく自分の肩にはまだ背負袋がのっかってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.